

---

# 西アジア型農耕の西方展開

---

The Western Expansion of Agriculture in West Asia

三宅 裕

MIYAKE, Yutaka

[Abstract] The agricultural society in West Asia based on the domestication of grains, legumes and ungulate animals is supposed to be originated in the Levant. Anatolia, especially the highland beyond the Taurus Mountains, is assumed to play an important role in the spreading of the early farming society toward the west, ultimately reaching in West Europe.

In central Anatolia the earliest farming society so far was founded in the first half of the 7th millennium b.c. According to the evidence from Aşıklı Höyük, no domesticated animals was attested, while the wheat cultivation was already practiced. It seems likely that the agricultural society based on both plant and animal domestication was established in the beginning of the Pottery Neolithic, the 6th millennium b.c. Northwestern Turkey was inhabited by the local hunter-gatherers with microlithic industry, which is comparable to Epi-Gravettian, even in the early Holocene. The early farming villages appeared in the middle of the 6th millennium b.c. From the beginning there was the evidence of plant and animal domestication. It can be concluded that the new way of subsistence was introduced from central Anatolia.

## 1

ヨルダン河谷からユーフラテス川中流域にかけての"レヴァント回廊"を中心に起源したとされる西アジア型農耕は、ムギ・マメ類の栽培に加え、ヤギ・ヒツジ・ブタ・ウシの家畜飼養がバランスよく組み合わされた形となっている。特に家畜の乳という資源を早くから開発したこともあって、他の農耕類型と比較して家畜の果たす役割が高いことが大きな特徴となっている。これらの栽培・家畜種を基本とした農耕形態は、西はヨーロッパから、東は中央アジアやパキスタンまで広がり、ユーラシア大陸の西半分を占める地域の基本的な生業となってきた。このことは、西アジアに起源した農耕が、そこを中心に一方は西方に向かい、もう一方は東方に向かって浸透していった結果であると考えられることができる。

## 2

アナトリアは、西アジア型農耕の西方への展開について考える際に、非常に重要な位置にあるとすることができる。しかし、これまでアナトリアの新石器時代についての評価は、大きく揺れ動いてきた。単純な伝播主義的傾向が強かった時期には、アナトリアは、メソポタミアで起源した先進

的文化がヨーロッパに伝播していく際の通過点ないしは橋渡しの役割を果たしたと考えられていた。しかし、当時は正当に評価される新石器時代の遺跡が知られていなかったこともあって、農耕社会がアナトリアに成立したのは時期的に大きく遅れるものと評価されていた。その後、新石器時代の遺跡がアナトリア高原にも存在することが明らかとなったが、時代は年輪年代補正に基づくいわゆる第二次ラジオカーボン革命の中にあり、伝播主義的な枠組みは崩壊してしまう。この余波を受け、農耕の起源についても、ヨーロッパ独立起源の可能性が探られることになり、アナトリアの新石器時代については明確な位置づけがなされない状態が続くことになる。現在では、ヨーロッパ独立起源説の前提となっていた条件が成立しないものであることが明らかとなり、西アジアに起源した農耕が、アナトリアそしてヨーロッパへ波及していったことはほぼ確実となったといえることができる。

### 3

中央アナトリアでは、前7千年紀前半には定住的なそして大規模な集落が既に成立していたことが明らかになっている。アシュックル・ホユックの例をみる限り、この時期には家畜を飼養していた証拠は認められず、動物性食糧は狩猟によって獲得されていたようである。植物を栽培していた証拠はみられるものの、どの程度生業の中心となっていたのかわからない部分もある。アシュックル・ホユックでは、矩形プランのレンガ作りの建物、プラスターの利用、打製石器など、レヴァントの新石器文化と共通する多くの要素が認められた。しかし、その一方で細石器が残存するなどレヴァントとは異なる面も認められ、これは在地の伝統を継承するものとして評価することができる。生業についてもレヴァントと同じ形をとるのではなく、周辺の生態学的環境に適応する形で様相を異にしていたことが理解される。中央アナトリアに家畜が導入されるのは、前6千年紀初頭の土器新石器時代の開始を待たなくてはならない。ムギ類を中心とする農耕の証拠も、より確実なものが増えてくる。この地域における西アジア型農耕の確立は、レヴァントよりも1,000年程度遅れていたことになる。

### 4

北西トルコでは、完新世に入っても細石器が残存していたことが明らかになってきており、これは黒海沿岸や南東ヨーロッパにおいて認められる続旧石器時代文化の範疇に含めて考えることができるものである。おそらく遊動的な狩猟採集民によるものと考えられる。新石器文化がこの地域に及んでくるのは前6千年紀半ば頃であり、それは栽培植物・家畜・土器などがセットとなったもので、中央アナトリアで確立された新石器文化に起源を求めることができる。しかし、住居跡や打製石器などに在地の伝統の継承を認めることができ、在地の狩猟採集民による農耕文化の受容と評価することができる。